



お正月特集 このまちで笑顔になる

年頭に当たって



荒川区長
にしがわ たいいちろう
西川 太一郎

新年あけましておめでとうでございます。区民の皆様におかれましては、元号が「令和」となっており、初めての新年を健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は度重なる台風の襲来で、国内に甚大な被害がもたらされました。幸い区では大きな被害がありませんでしたが、改めて「災害で一人の犠牲者も出さない」と強く決意し、これまでの震災対策に加え、風水害対策のさらなる充実を図って参ります。

さて、今年はいよいよ東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、世界各国から多くの人々が東京を訪れます。また、7月20日には、全国を巡ってきた聖火リレーが区を走行し、南千住野球場で聖火の到着を祝う式典「セレブレーション」を行う予定です。

そして、十二支最初の子年である今年、区は新しいチャレンジに力を入れて参ります。児童相談所機能を有する「子ども家庭総合センター」を開設し、「未来社会の守護者」である子どもたちが健やかに成長できるように万全の体制を整えて参ります。さらには大規模改修した荒川総合スポーツセンターや、新たな尾久図書館、(仮称)日暮里地域活性化施設を地域の顔として次々と開設していきます。

私はこれからも、区民の皆様が一番近い基礎自治体の長として、加速度的に変化する社会状況の中で常に未来を見据え、さまざまな施策を実行し、区民の皆様誰もが真に幸福を実感できる温かい地域社会を築くため、全力で取り組んで参ります。結びに、本年が区民の皆様にとって、素晴らしい一年となりますよう、心からお祈り申し上げます。年頭のあいさつといたします。

オリンピック選手になるために



▲クラブチームの様子



▲両親に支えられ頑張っています

両親と姉はバドミントンがとても得意で、その影響をうけて始めました。汐入こども園の年長で入ったクラブチームから本格的に始め、平日はほぼ毎日練習して、週末は試合で全国を巡っています。昨年の6月に、東京都から「東京アスリート認定選手」に認定されたことを聞きました。とても身が引き締まる思いがします。家族・コーチ・学校の先生等、さまざまな方に支えられていることを思いながら、日々練習を頑張っています。

都立汐入公園を走っています

都立汐入公園が家から近いこともあり、よく走っています。緑が多くて、四季の景色を見ながら走るのが、とても気持ちがよく気分転換になります。昔は、試合に絶対勝ちたいという気持ちが強かったです。スポーツはすべて勝つものだと思っていて、試合に負けると不機嫌になったり、泣いたりしていました。両親から「もっと楽しめばいいよ」と言われてから、少しずつ変わってきて、今は「勝つよりも楽しくやること！」が一番だと思っています。内容を充実させてバドミントンを楽しみたいと思うようになりました。試合で、長いラリーの後や自分で考えた作戦で点が決まった時は、声が出るくらいうれしいです。逆に相手のペースにのまれてミスが続くときは、気持ちが途切れてしまっているので、「大丈夫！楽しもうよ！」と自分やダブルスのパートナーに言っています。将来はオリンピックの選手になって活躍したいです。



▲学校の様子



汐入東小学校6年 東京アスリート認定選手(バドミントン) **深尾 優太さん**

荒川の大空に国蝶「オオムラサキ」を

20年前、ゲーム機等が流行っていて、子どもたちの他者への思いやりに欠ける行動がたくさん目に映りました。荒川の子どもたちに命の尊さを伝えたい、荒川にはいない国蝶「オオムラサキ」が大空に飛んでいるところを見せてあげたいと思い、活動を始めました。オオムラサキは、クヌギやコナラが育つ里山にしか育ちません。一般的な蝶は3か月程度で蝶になりますが、オオムラサキは夏に卵からかえり、幼虫のうちに5回脱皮を繰り返して、1年をかけて6月に蝶になります。



▲長年、オオムラサキを見守っています



▲落ち葉に張り付き幼虫のまま冬を越すため、落ち葉を敷き詰めます

荒川自然公園の環境で育てていきたい



NPO法人オオムラサキを荒川の大空に飛ばす会事務局長 **安田 幸雄さん**

オオムラサキを荒川の自然環境で育てるのは、「難しい」と言われました。最初は茨城県でボランティアをして荒川自然公園内の昆虫観察園にあるエノキの葉っぱに置きましたが、育て方がわかっておらず2週間後にほかの虫に食べられてしまい、成功したのは3年目(平成14年)でした。今いるオオムラサキは、16代目です。ここまで育てることができたのは、荒川自然公園の自然環境のおかげだと思っています。里山に近い木がたくさんある環境で育てられたのは、本当にありがたいと思っています。毎年6月上旬から荒川自然公園でオオムラサキ観察園が開かれ、約50匹のオオムラサキが飛びます。さなぎから出てくる様子を子どもたちは目を輝かせて観察しています。子どもの輝く未来が絶えないように、今後もオオムラサキを見守り続けようと思っています。



60っまでも元気に看板娘



私が就職したのは、昭和31年です。栃木県栃木市鍋山町から上京し、日暮里の菓子玩具問屋に就職しました。そのころ、日暮里には約150軒の菓子玩具問屋がありました。10代だった私は、故郷が恋しいと思うこともありましたが、その思い以上に周りの方はとても優しく、さまざまなことを教えてくれました。数軒先の「大屋商店」で働いていた夫と結婚し、夫が亡くなった今も意志を引き継ぎ元気に働いています。



▲笑顔で頑張っています



駄菓子・玩具の問屋「大屋商店」(西日暮里2-25-1) **大屋 律子さん**

ここから見る日暮里の景色が大好きです

1年を通して、お店にたくさんのお客さんが来てくれます。夏は、町会等の祭りで使う光のおもちゃが人気です。いつもはお菓子がある店内も、夏を迎えるころには光のおもちゃがたくさん並びます。学生が文化祭で「駄菓子屋コーナー」を開くために買いにも来ます。駄菓子は珍しいみたいで、人気ようですよ。

昔、親と一緒に来た子が、今は大人になってお子さんを連れてお店に来てくれる光景に時代の流れを感じます。お客さんの「また来るね」の言葉に元気をもらっています。私は、ここから見る日暮里の景色が大好きです。時代とともに景色は変わるけれど、やっぱり懐かしくて落ち着ける場所です。



▲日暮里菓子玩具問屋街(昭和31年) ▲たくさんのお客さんが来ます

あらかわで叶えたい **想いをカタチに**

あらかわには、素敵な人がいる。素敵な場所がある。今一度、感じてほしい。あらかわの良さを。ここから未来・世界に通じていく。

問合せ 広報課広報係 ☎内線2138

私たちができるのは「寄り添い」

3人の子育てをしてきました。子育てを卒業後は我が子の子育てが地域の子どもの子育てに代わり、応援してきました。地域の子どもたちに関わっていく中で生きにくさを抱えた子どもたちに出会い、地域での長い寄り添いが必要と考えるようになりました。子どもたちが「学習に向かう気持ち」になる場を作ろうと、平成26年に「子ども村：中高生ホットステーション」という「居場所」を作りました。



▲調理・学習支援等さまざまな形で子どもと関わっています

尾久から始まった「子どもの居場所作り」

他区の子ども食堂を見学しに行った時に、調理の「音・湯気・匂い」を感じて、楽しみに待っている子どもたちを見て、荒川区の子どもたちにも同じ気持ちを感じてほしいと食事の提供を始めました。始めてみると、食生活が不安定な子、保護者の帰宅が遅く1人で家にいる子等、問題を抱えている子が見えてきました。子どもは、見た目だけではどのような子かわかりません。食事の提供や学習支援をして長時間一緒にいることで、問題を抱えた子どもたちの本当の姿が見えてきます。子ども村：中高生ホットステーションには、調理・学習支援・進路支援・相談・遊び等のボランティアの方がいます。自分のできる範囲でさまざまな世代の方



が子どもたちに関わっています。支援される人、支援する人の垣根をなくし、子どもたちと同じ目線で共感する。「そうだよ」「大変だったね」等の言葉と気持ちで共感することで、信頼関係が築けてもうひとつの「家族」になれます。長い時間を過ごし子どもたちの未来と一緒に考えることが、「生きる後押し」になってくれることを願っています。



子ども村：中高生ホットステーション代表 **大村 みさ子さん**



